

研究ノート カムリの国の地名研究：落穂拾い（その4）

第2枝：地名パンディ *Pandy* -2- 水谷 宏

Lloffion: Astudiaethau Enwau Lleoedd yng Nghymru (4)

Yr Ail Gainc: *Pandy* -2-

Hiroshi Mizutani

承前

4. *Pandy* の地名とカムリの国の羊毛産業

カムリの国の地名である「パンディ」*Pandy*（普通名詞の *pandy* の複数形は *pandai*）についての研究は、前稿の終わりに近いところで少し触れたように（「日本カムライグ研究」第3巻第2号 p. 37）、カムリの国の羊毛産業との関わりが深い。【羊毛産業】*woollen industry* という表現が多少気になるが、【羊毛生産、羊毛の生産】*woollen manufacturing, woollen production* といった表現のほうが適切かも知れない。というのは、Jenkins, J. Geraint (1969:xvii)（本稿の末尾に収録している参考文献を参照願いたい）にも、この国での羊毛の生産が、単に、自給自足の農村社会に必要な程度の供給をするという段階を過ぎ、イングランドのヨークシャーに匹敵する産業地域に発展する可能性を秘めていた地域もなくはなかったが、カムリの国の羊毛生産の最盛期においてすら、組織力・資本力が不十分であったために、「こうした可能性が実現することはなかった」との指摘が見られるからである。事実、同書を読んでいると、羊毛を作る仕事に関して、「家庭内の作業」‘*domestic craft*’ (p. 82.), 「家内産業」‘*domestic industry*’ (p. 114.) といった表現に多々出会うのである。いずれにしても、パンディの地名研究は、カムリの国における羊毛生産の発展と衰退の歴史に深く関わっているのである。事実、ジェンキンス博士は、カムリの国の羊毛産業 *Welsh Woollen Industry* について記述するにあたり、同書（上掲）のあちこちで、カムリにおける地名研究の大御所である Melville Richards 教授からの情報提供に対しての謝辞を繰り返しておられるのである。カムリの国の羊毛産業の詳細についての記述は、その機会に恵まれれば別稿に譲り、本稿においては、地名のパンディ *Pandy* に関係の深いことだけについて述べるに留める。さしあたっては、参考文献に挙げた羊毛生産関係の文献を参考にさせていただければ幸いである。

前稿でも触れたように、羊毛を縮絨する作業は、ローマ人によってローマ時代に既にブリテン島にもたらされた技術の一つであるとされており (Jenkins, J. Geraint (1969:81)、カムライグ語 *pan* 'fulling' はラテン語 *pannus* 'cloth' からの借用であり、同語源にはブルトン語 *pan~n*, コーンウォール語 *pan* があることから、カムライグ語の前身であるブリティッシュ方言の時代から用いられていた (Melville Richards (1969:351) 'Welsh Place and Personal Names Connected with the Woollen Industry', *Appendix 1*, pp. 351-372. in Jenkins, J. Geraint (1969).)。しかし、14世紀までは足で踏んで縮絨する方法が採られていて、中世から19世紀にかけては、カムリでは 'walk mills' [歩行(による)縮絨場] の呼び名も広く用いられていたようである (Jenkins, J. Geraint. (1969:81-2)。

しかしながら、14世紀に地域住民のみを対象とする家内生産的なものからより商業的な「事業」と呼べる段階への発達が見られ、その中心となる技術革新の一つが、カムリの国に極めて豊富な水力を利用する「縮絨水車小屋」*pandy* の導入であった (Jenkins, J. Geraint (1969:101-2)。

カムリにおける最初のパンディの設置は、1300年ごろのペンヴロ州 Sir Benfro との説もあるが (Mendenhall, T.C. (1953) *The Shrewsbury Drapers and the Welsh Wool Trade in the XVI and XVII centuries*.—ただし、筆者は未見)、Melville Richards 教授のジェンキンス博士への示唆によれば、その5年前の1295年の「ドール・ア・セーネ」*Dol-y-sece* というところとの説もある (Jenkins, J. Geraint (1969:101)。この地名は中世の地名であり、現在、その位置を確かめる方法はないものの、ジェンキンス博士は、ブラヘイニオグ州 Sir Frycheiniog ([英名] Brecknockshire または Breconshire) のポントセニ *Pontsenni* / [英名] *Senny Bridge* の可能性が高いとしている (Jenkins, J. Geraint (1969:102)。ポントセニ (22/9228) は、サナムザヴリ *Llanymddyfri* (22/7634) (口語ではサンダヴリ *Llandyfri*, [英名] *Llandoverly*) とアベルホンジー *Aberhonndu* (32/0428) ([英名] *Brecon*) とを結ぶ A40 号線上にあり、中間点よりややアベルホンジー寄りの地点である。セニ川 *Afon Senni* が南から北に向かってポントセニの村を通り過ぎたあたりで、ウイスグ川 *Afon Wysg* の上流に注いでいる。今の時点では、発掘調査の方法でも用いない限り、このセニ川の周辺にパンディが存在した証拠を見つけることは不可能である

が、現在、このポントセニの村のほぼ真北 1.5 キロの地点に *Pentre'r felin* 「水車小屋の村」 (22/3190~3290) という名の小村がある。ただし、この村についてのジェンキンス博士やメルヴィル・リチャーズ教授の発言は見当たらない。なお、上記の「1300 年ごろのペンヴロ州との説」については、フランドル人 *Flemish* の織物職人の移住と関係があるとされるが、ジェンキンス博士は、フランドル人のその地域への移住の年代からして、彼らがパンディをカムリに最初に導入したとは考えられず、カムリへのパンディの導入はカムリ人によるものとの発言をしている

(Jenkins, J. Geraint (1969:102-3)。

カムリへのパンディの導入が、カムリ人によるものかフランドル人によるものかについては、両者によると見るのが冷静な判断ではないだろうか。当時の両者が、互いに反目しあっていて、文化や技術の交流なり、相互に学びあうという状況にはなかったことを考慮すると、別々にパンディを建設したものと考えるのが妥当であろう。移住してきたフランドル人には、大陸からのフランドル人だけではなく、既に、イングランド北部に住んでいたフランドル人も含まれていて、そうした人々には、パンディを作る技術は既にあったものと考えられる。

そもそも、こうしたフランドル人のカムリへの移住は、イングランドによる植民地化のもっとも有効な手段として実現をみたのである。即ち、少数の紳士階級を送り込むよりは、大勢の農場労働者を送り込む方が、イングランドによるカムリの併合・征服にはより効果がある (*wrth gadarnhau concwest, mae setliad trwchus o werin estron yn fwy effeithiol na haen denau o bendefigion*, ... Davies, J. (1990:110) / *a dense settlement of peasants is always a more effective way of consolidating conquest than a thin layer of gentry*. ... Davies, J. (1993:114) との政治的な判断によっているのである。そのような移住民族にパンディを建設したり、カムリ中の羊毛の原材料を買占めることができたのは、王室の庇護があり (*Cawsant nawdd arbennig y goron*... Davies, J. (1990:110) / *they received the special patronage of the crown*... Davies, J. (1993:114)、恐らくは助成がなされたものと推測される(助成金の有無、またその額等についての文献的資料は、現在の筆者は未見である)。

14 世紀に入ると、カムリの国の水車小屋の数は一挙に増し、最初の 30 年間に 71 以上の水車小屋がカムリの国の全域に建てられたとの

ことである (Jenkins, J. Geraint (1969:104)。それまでは、フランドル人が羊毛の原料の大部分を奪い、羊毛の生産はフランドル人の一手に握られていたが、急速に衰退したために、カムリ人の手に戻ったという経緯があったようである (Jenkins, J. Geraint (1969:100))。

5. 行政教区名に隠された *Pandy* の地名

16世紀から19世紀にかけて、カムリの国中に *pandy* が建設され、まさに林立する状態であった。したがって、カムリの国で旅をすれば、*pandy* その他の羊毛産業に関連する施設に出会うことなく旅をすることはできない (Jenkins, J. Geraint (1969:xvii) という表現も決して誇張ではない。筆者自身の体験でも、1979年の夏に、サンベドル・ポント・ステファン町のカムリ大学デウイ・サント学寮 Coleg Dewi Sant, Prifysgol Cymru, Llanbedr Pont Steffan (当時の名称) でのカムライグ語の集中コースに出ていた時、クラス全員で周囲の散策に出かけたことがあり、大学のすぐ裏の小高い丘に登り、牧場の中を歩いていると、*pandy* の残骸が、利用されなくなった水路の傍らに、ポツンと寂しく放置されていたのを目撃したことがあった。セティトゥムパ Llettytwmpa という名の農場の中で、22/5949 の地点ではなかったかと推測している。

Melville Richards (1969) 'Welsh Place- and Personal Names Connected with the Woollen Industry', *Appendix 1*, pp. 351-372. in Jenkins, J. Geraint (1969) には、*pandy* という語が、単独で地名として挙げられているものが184あり、さらにこの単語の後に形容詞の *bach* 「小さい」や *mawr* 「大きい」などが付いているもの、あるいは、*pandy* が属格的表現として用いられて「パンディの」として用いられ、その前に *cae* 「野原」や *nant* 「小川」のような地勢を表す表現が用いられているものを含めると、*Pandy* の地名は267の多きに達するのである。そのほか、*pandy* の単語は用いられてはいないが、*deintur* 「張り枠(紡績にもちいる)」、*melin ban* 'fulling mill', *pannwr* 'fuller' 等々の「縮絨工程」に関係する単語で表されるもの81を加えると、実に348の地名が挙げられている。地名 *Pandy* の、このような密度の高い分布は、ほぼ村々に一つは *pandy* が建設されたと言える状態であり、それには次のようなカムリの国に独特の事情があったのである。

まず最初に言及すべき点は、丘陵地や山地の多いカムリの国では、長年に亘り、羊は住民の衣食を支える重要な産物であって、食用の肉

と暖を保つための羊毛とは、幾世代にも亘って住民の生活上の必需品であった (Tibbott, S. Minwel (2002:141) という点である。さらには、田園部に暮らしていた住民のほとんどの人たちが、極めて狭く限られた地域を生活拠点とし、その村に生まれ、一生をその村で過ごし、衣食の要求は、ほぼすべてが生まれ育った限られた地域で満たされるという、正に、自給自足の共同社会での経済生活に依存していたのである (Jenkins, J. Geraint (1975:5)。したがって、交通が不便だったころは、村から村への移動は、極めて稀なことであったと推測されるのである。

主婦たちが、二週間分の食事を用意して、農場主の許しを得て、農場の垣根に付いた羊の毛を櫛で梳くようにして集める (gwllana「羊毛集め」) 習慣が古くはあり、「貧困の文化」とさえ呼ばれていたという (Owen, Trefor M. (1991:7)。

こうした共同社会の状態から、自然、pandy のような設備は、村人が共同で利用するためには、村ごとに設置される必要があったのである。そして、水力を利用するためには、急流の小川に沿って多数の pandai が作られ、「数多くの峡谷にみられ、その原材料は荒涼とした山々や原野、高原に住む、小さく痩せこけた羊の依存して」 (Jenkins, J. Geraint (1969:113-4)、縮絨の仕事のほとんどが農夫のパートタイムの仕事として行われ、農場の設備の一つとして pandy が建設されたのであった (Jenkins, J. Geraint (1969:175))。

このような事情から、カムリの国に広く分布した pandy という設備・施設の名称が、地名として残るには限界があった。したがって、その多くは地図に掲載されることなく、共同利用の施設としての pandy が使われなくなると、地名としても残らなくなっていったのが実情であった。

「羊毛産業がトゥレヴァルドゥイン州 Trefaldwyn とその隣接の州に設置されるようになった最初のきざしは、この地域に 1546 年に縮絨水車小屋が出現したことであった。縮絨水車小屋は 14 世紀以来、南部カムリに広まったが、中部や北部のカムリでは、16 世紀後半から 17 世紀初頭までは一般的ではなかった。急流の小川が何百もあり、その岸が pandai を建てるのに適した場所を提供してくれたのであった。トゥレヴァルドゥイン州の地名に pandy という語が広く分布しているが、間違いなく、この州の歴史上、縮絨水車小屋の重要性を

示しているものと言える。」(Jenkins, J. Geraint (1969:117))

そして、Berriew (33/1800), Castell Caereinion (33/1605), Cemais (23/8306), Darowen (23/8301), Hirnant (33/0522), Llanbryn-Mair (23/8800;8900), Llangynyw (33/1209), Llanidloes (22/9584), Llanwrin (23/7803), Penegroes (23/7700), Llanfihangel-yng-Ngwynfa (33/0816), Llanwnnog (32/0293), Llanwyddelan (33/0801), Uwchgarreg (22/7592), Trefeglwys (22/9790) の行政教区名(地点番号は Davies, Elwin (1975) による)を挙げている。

なお、最初の地名 Berriew は、より正確には Aberriw 即ち、リウ川 Afon Riw が西のほうから流れてきて、ハヴレン川 Afon Hafren ([英名] Severn「セヴァン川」) に注ぐ河口の近くにある。このように、aber- で始まる地名には、アクセントのない最初の音節が脱落して Ber- となるものが他にもあり、北部にある Bermo < Abermo (23/6115) ([英名] Barmouth) がそうである。しかし、Berriew, Bermo の形は口語形であり、カムライグ語の地図では文章語として Aberriw, Abermo を用いているものもある。また、現在の *OSRA2000* その他には、掲載されていない地名が二つあり、その内の一つ Llangynyw (33/1209) は、Glascoed (33/1108) のほぼ真北 1 キロの地点で、恐らく B4389 号線上であろうと思われ、もう一つの Uwchgarreg (22/7592) は、現在は原野に近い状態の場所にあり、New Pool (22/7492) という湖の東約 1 キロの地点と思われる。いずれも、Davies, Elwin (1975) には掲載されていて、その地点番号から地図上で位置を推定したものである。

そして、「他にいくつかの pandai が ア・ドゥレネウイーズ Y Drenewydd (32/1091) の町と隣接地域、特に、モッホドゥレ Mochdre 谷 (32/0788) にあったが、地名としての pandy の語は、この地域からは消えた」(Jenkins, J. Geraint (1969:118)) とのことである。

町村の施設としての pandy が、町村名として地図に掲載されるのは極めてその数が少ないが、カムリの国の当時の最小の行政上の単位としての parish 「行政教区」内に、かつてのその存在の証拠として残っているものが大多数である Melville Richards (1969)。

イングランドを発祥の地とする「産業革命」の荒波を、まともに被ったカムリの国では、地域住民の生活を幾世紀にも亘って支えてきた pandy は、それを改良・改善する資本力・組織力の欠如とも相俟って、

最盛期には何百とも数えられたにもかかわらず、次第に姿を消していくことになったのである。丁度、萼（うてな）に抱かれるように咲き誇った満開の桜の花が散り、風雨に打たれた萼がその後を追うがごとくに地面に落ち、朽ちていくように、カムリの里から消えていったのである。今となっては、Melville Richards (1969) に掲載されている行政教区名を頼りに、その町村を訪れて、地元の比較的年配の村人に聴き取り調査を実施して、かつての *pandy* の所在地を見つける以外、正確にその位置を知る術はない。しかし、そのような現地調査は、大変な作業であり、よほどの大規模の調査を実施しない限りは、不可能なことであろう。また、仮に実施できたとしても、かつての *pandy* の所在地を知る村人が何人見つかるかも不明であり、極めて困難な作業であろう。

豊かな自然に恵まれたカムリでは、「水名学」的地名の多いことは、本研究ノートの(1)（「日本カムライグ研究」第2巻第1号 pp.38-9.）で述べたとおりである。テイヴィー川 Afon Teifi が、ケレディギオン湾 Bae Ceredigion に注ぐ河口 (aber) の町は、アベルテイヴィー Aberteifi 「テイヴィー川河口町」であったり、古い家 *hen dŷ* のそばに小川 *nant* が流れている村を、*Nant yr hendŷ* 「古家小川村」と名付けたりする。一方では、教会の多いこの国の全域にサーン *llan* 「教会」で始まる地名が分布している。「教会」という建造物・施設の名称が、普通名詞として用いられず、固有名詞化して「地名」として用いられるのである。現代のわれわれでも、銀行や郵便局など、お互いに了解が成立している場合には、「銀行へいきます」「郵便局の前で待っています」等々と、まるで「地名」のように施設の名称を用いることがある。「パンディ」*pandy* という、その村にとって大切な施設は、あたかも「地名」であるかのごとく使われて、そのうちに、その辺り一帯の村の名前になり、定着してしまった例もいくつもある。「パンディに行ってきてちょうだい」とか「パンディからの帰り道で出会ったよ」などと使われていたたのであろう。その共同体に住む人たちにとっては、*pandy* は施設を表す単なる普通名詞ではなく、それが建っている場所の「地名」なのである。

参考文献

Davies, Elwin (1975) *Rhestr o Enwau Lleoedd, A Gazetteer of Welsh Place-Names*, Cardiff: University of Wales Press.

- Davies, John (1990) *Hanes Cymru*, Penguin Books, London: Penguin Group.
- (1993) *A History of Wales*, Penguin Books, London: Penguin Group.
- Fitzrandolf, Helen E. and Hay, M. Doriol(1978) *The Rural Industries of England and Wales, a Survey made on behalf of the Agricultural Economics Research Institute, Oxford*, III. Decorative Crafts and Rural Pottery, Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. Geraint (1969) *The Welsh Woollen Industry*, Cardiff: National Museum of Wales and Welsh Folk Museum.
- Jenkins, J. Geraint (1975) *Welsh Crafts and Craftsmen*, Llandysul: Gomer Press.
- Owen, Trefor M. (1991) *The Customs and Traditions of Wales*, A Pocket Guide, Cardiff: University of Wales Press.
- Richards, Melville (1969) *Welsh Administrative and Territorial Units*, Cardiff: University of Wales Press.
- Skeel, C. A. J. (1922) 'The Welsh Woollen Industry in the Sixteenth and Seventeenth Centuries', *Archaeologia Cambrensis*, Series 7, II, pp. 220-57.
- (1924) 'The Welsh Woollen Industry in the Eighteenth and Nineteenth Centuries', *Archaeologia Cambrensis*, Series 7, IV, pp. 1-38.
- Sutton, Ann (1987) *The Textiles of Wales*, London: Bellew Publishing Company Limited.
- Tibbott, S. Minwel (2002) *Domestic Life in Wales*, edited by Beth Thomas, Cardiff: University of Wales Press, National Museums, and Galleries of Wales.

[次号に続く]